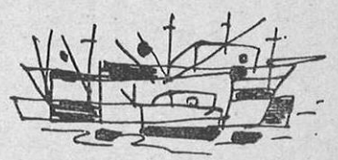
"沿岸漁業不振"とはいうけれど……



―近海漁業で気をはく二江漁協―

沿岸漁業は不振だという。最近では、これを打開するために、活路を近海漁業に求め、船団を組んで達く対島あたりまで出漁する漁協が増えてきた。

なかでも天草郡五和町の二江漁協は、古くから近海漁業に出漁し、その先輩格というところ。

しかも、内にあつては組合の健全運営を図つて〝伸びゆく漁民〟の意気も高い。

対島・五島・薩南近海へ

戦前は東支那海をマタにかけて獲りまくり、今でもよくしられているアワビ取りの裸モグリは、大連あたりまでも進出していたという。終戦後漁場を失つた二江の漁家は、沿岸漁業のみに頼らず、他の漁協に先がけて「曳ナワ漁業」で近海出漁にふみ切つた。

現在では十八隻が九月に出漁し、対島近海からブリ、ヒラス、ヒビ等を追つて五島、薩南近海まで南下する。二江港に帰港するのは翌年の四月というから、出漁期間は約八ヵ月。この間の一隻当り水揚量は金額にして大体百万円前後、純益にして二十万～三十万円にもなろうという。

だが近海漁業は割が良いとは言つても、漁具の新調や燃料代その他のために相当な資金が必要。だから出漁の際は組合が一隻当り平均十万円程度借してくれる。

上りッ放しの漁獲収益

近海漁業にせよ沿岸漁業にせよ、漁協が強力でなければならない。

その点二江漁協はよくその機能を発揮している。

減少していく魚を増殖するためには国と県の補助をうけて、「魚巣」を海底に投入した。三十五、六年度はタコの産卵施設を投入する計画だという。

沿岸漁業の面では、漁獲高は全県的に減少の傾向にあるというが、二江漁協では金額の面から見ると三十年度から上りッ放し。三十年度約一千七百万円（約二百七十トン）から三十二年度約二千七百万円（約三百十万トン）三十四年度は約三千四百万円（約二百七十トン）というように、漁獲量からいえば大した変りはないが、金額は俄然上昇し始めている。魚の種類は主にタイとタコで、「出荷先は全部阪神方面。鮮漁船で輸送しているが、熊本相場よりもうんと良い」とハナイキは荒い。

すゝむ漁船の動力化

又、二江漁協は漁船の動力化も着々進めている。三十二年度には動力船七十隻、無動力船二百九十八隻即ち動力化十九%だつたものが、今年度は動力船二百隻、無動力船二百二十二隻というように、動力船が全体の四十七%にも達する。これは天草郡平均四〇%を上まわつている。

この動力化も、漁協の資金でやるのではもちろんなく、大部分が農林中金の融資と、「沿岸漁船整備促進法」による利子補給に頼るわけだが、これとて漁協がしつかりしていなければかなわぬこと。

この点、二江漁協は販売事業も併せ行つているため、償還面でも心配いらず、又、県水産業協同組合育成対策協議会のモデル組合に指定されているだけあつて、関係機関の信用も厚い。

このような組合の力はどこから生まれてくるのであろうか。それは組合員の積極的な盛り上げが最も根本的な原因ではあるが、又、近海漁業で培われた充実した資金面なども大きな力となつているのではなかろうか。

県下初の婦人部も

その他、この組合のご自慢のものに、県下唯一という漁協婦人部があることも見逃せない。

漁師の男達が留守がちだから、何としても主婦がしつかり家を守らなければ……それに漁師は昔から収入がある時はパッとつかい、ない時はキュー〳〵。これでは漁師の家庭は何時までたつても立ち上れない……ではひとつ漁協婦人部をつくつて、ガッチリまとまつていきましよう、というわけで結成したのが三十三年の十二月。今年の四月にはすでに百五十一名の会員にふくれ上つた。

漁協の婦人部に対する指導育成の考え方もハッキリしている。事業をしないなら助成はお断り、というのであるから、婦人部もハリきらざるを得ないわけ。

貯金をする漁師たち

婦人部の現在の目標は「予算生活」と「貯金」。漁協では家計簿のつけ方の指導に乗り出そうと計画中であるし、貯金の方は四月末から始めて、すでに総計十六万円という。正味一ヵ月も経たないのであるから好成績といえる。

この貯金のために、漁協ではプラスチックのコケシ型貯金箱を各家庭に配つたが大好評。「お父ちやんも荒れくれた手で十円玉ば入れてくるつとですよ」といつて喜ぶおかみさんもいる。いまやコケシ貯金箱は漁師さんのマスコットになつてしまつたらしい。

「漁師は貯金をしない」という昔からの習慣を破つて、予算生活と貯金に熱を入れ出したということは、家庭のみならず、漁協強化に非常に大きな力を与えることであろう。

これがまた、漁業の振興→水揚げ増大→所得の増加→生活の計画化→貯蓄向上→漁協強化という一連の循環を起すわけで、新しい生活基盤に立つた新しい漁民として、これからの成長が大いに期待されている。

（水産課・広報課）

大人の指導でより楽しく

たのしいはずの夏休みに、ちよつとした不注意から尊い一命を失つたり、又非行を起すこどもが少くありません。

昨年は、七、八月のこどもの水死者が、六五名の多数に上り、一昨年に比べ五割以上も多く、特に幼児の犠牲者の増加が目立ちました。

また夏休み中に警察に補導された学生も昨年は一昨年に比べ三七七人も多い一〇二五人となつています。（県警防犯課調べ）

× × × ×

それでは、どのようにしたら、これらの事故を防止することができるか、考えてみましよう。

地域ぐるみの指導を

では、事故の起りそうな原因を考えてみましよう。

まず、夏休みに解放されたこどもたちの心のゆるみ。暑い夏の夜は、なかなかこどもたちも寝つかれず、夜ふかしが多くなります。

海水浴やキャンプでの集団行動はとかく問題を起しがちです。河、池などでの水遊び、道路上の遊戯、飲食物への不注意などが原因として挙げられますが、これだけのことに親が終始目を配るのは容易なことではないようです。

子供会を中心に

まず余暇の活用と、規則的な生活をつくることが必要です。その点で、子供会活動は最も効果的だと思われます。

この機会に、子供会の組織化、活潑化をはかり、会相互の連絡や技術、意見交換を行いましよう。こどもたちは、会で決めたことには素直に従うものですが、父兄もこれを温く見守つてやりましよう。

次に夜間外出はとかく不良化への原因となりがちですから、鐘、サイレン、有線放送等を利用して、帰宅の時刻をしらせましよう。

キャンプなどの野外活動は、ゼヒ適当な指導者が必要。

水遊びには監視員を

水難事故の防止に重点をおきましよう。それには、地域で、関係者が集り、水遊びの適所、不適所の指定をして、不適地には柵、立札などによりその旨標示しましよう。できれば、監視員（児童委員や婦人会員など）をおいて、万一、事故発生の際は、有線放送や掲示板等を利用して速報し、父兄の関心を深めましよう。

また、防空壕跡、古井戸などもこどもの事故を誘い易いものです、埋め立てるか、できなければ、柵などをめぐらすことにしましよう。

事故防止で大切なことは特に幼児からは目を離さぬこと、小さいこどもだけで水遊びにやらないこと、大雨後は川の近くに行かないこと。これらは親の注意でできることで、しかも大切なことです。幼児の事故はちよつとした隙に起ります。

次に、夏に多いのが花火による事故です。これは、こどもに一時にたくさん持たせないこと。花火の遊び場を指定すること、万一事故発生のときは、原因を父兄に速報すること。

（婦人児童課）

学校に出しておけば、先生に十分に指導監督をしてもらえますが、両親の膝下で子供達は、この夏休みをどんなにして過ごしたらいいでしようか。

この季節は大人でさえも、暑さで身体の調子が狂い易い時です。発育盛りの子供には尚更のことです。日本脳炎、赤痢、疫痢の好発時期ですし、又今年は急性灰白髄炎（ポリオ或は脊髄性小児麻痺、普通小児麻痺ともいいます）も例年より多い様です。規則正しい生活をさせて、十分な休息と栄養をとり、こんな病気をはねとばす体力をつけてやつて下さい。

常識的なことですが、汗が出たり、濡れたり、汚れた衣類は清潔なものとかえさせ、暴飲暴食をさけ、生水を飲まず、夜ふかし、疲労をさせない様にして下さい。又食欲が減退しますが、十分の栄養がとれる様にしてあげて下さい。学校では割によくやつていますが、家庭でも手洗いの習慣をつけて下さい。それだけでも胃腸の伝染病は少くなります。遊びたいために、一寸位お腹が痛くても、頭が重くても黙つている子供がありますから、日常の動作にも気を配つて、平常と異つている時は必ず確かめて、手遅れにならぬうちに医師の診察を受けさせて下さい。

それに、学校から連絡がありますが、目や耳の病気、寄生虫、歯の手入れ等も、この時間的に余裕がある夏休み中に宿題の一つとして立派になおしてしまいたいもの。

又ツベルクリン反応が陽転した人、レントゲン撮影をして要注意といわれた人（判然結核性のものと定め難い場合もありますが）は海水浴、水泳、登山の様な過激な運動はさけて、十分な栄養と休息をとつて下さい。

（衛生部）

規則正しい生活を